

つ
な
が
り

ま
ち
と

Sum⁰³

茨城県
東茨城郡
茨城町

Autumn / Winter 2017



Sun⁰³

茨城県
東茨城郡
茨城町

Autumn / Winter 2017

Contents 目次

- 03 特集 | まなび ひびく
- 07 ひびけ、うたごえ
- 青葉小学校と葵小学校の校歌 -
- 09 まちで暮らす人
まちを想う人
- 15 まちの知が集まる場所
図書館でつながる ひろがる ひびきあう
- 17 連載 マチのケシキ
- 18 編集室から



Cover
写真 / アラタケジ モデル / 松浦陽菜
撮影場所 / 茨城町立明光中学校
「読む」ことで、気づきと学びに触れる”
今回の撮影場所は町内にある中学校の図書室。
撮影の様子を伺いつつ、先人たちが様々な学んだ軌跡に
触れられる場所なのだと改めて思いました。

夏の喧騒が通り過ぎ

地が静けさを取り戻す頃

根付く草木は 黄金色へと姿を変える

秋霖しゅうりんがこの地を覆う度に

凜の歩みが 遠くに聞こえ始める

金風が田畑を駆け 恵みを揺らし

夕焼が 大地を紅く染め上げ

月明がその輝きを増す季節

Sunは

茨城町とゆるやかにつながる

いくつもの縁を

人々の暮らしや情景と共に

綴り伝えて行きます



まなび ひまなび ひびく

写真「アラタケンジ 文」米村優子

少にして学べば、則ち壯にして為すことあり
壯にして学べば、則ち老いて衰えず
老いて学べば、則ち死して朽ちず

佐藤一斎「言志四録」

まちと生きる人たち 世代や立場は皆違うけれど
日々の暮らしの中で 皆何かをまなんでいる
いきること そのものをまなびとするならば
まちは人々のまなびが ひびきあう場でもあります

秋は まなびの季節
それぞれの視点から見えて来ること
この地で体験し 教え 広めること
これからもまなび続けていく意味を伺いました

茨城県立農業大学校 畜産学科 一年
杉山琴美・飯澤野乃花・増田貴広

それぞれの道のために

体験からまなぶ

農業経営者を育てる「茨城県立農業大学校」の長岡キャンパス。その畜産学科に今年、茨城県外から三名の学生がやってきました。神奈川で養豚業を営んでいた曾祖父の影響で、畜産の仕事をした杉山さん。福島の農業高校で牛と触れ合う中、この道に目覚めた飯澤さん。森林環境に興味を持ち、関連する畜産の現場を経験しようと、埼玉から進学してきた増田さん。学科ではホルスタインとジャージー牛、黒毛和牛の三種類が二頭ほど飼養され、搾乳から牛の健康管理、繁殖技術、飼料の生産技術を一年間学びます。大切な牛の世話は一年生の仕事。当番になると朝四時に起床。餌やりや搾乳、牛舎の掃除をします。平日は朝のみですが、休日は夕方の世話も欠かせません。「休みもろくに取れなくて大変だけど、やりがいがあるから楽しいです」。本格的な畜産の経験を求めて茨城までやってきた飯澤さんは「コリと微笑みます。名前を呼ぶと振り向く「ベガ」。初産からようやく落ち着きを取り戻した「ポテト」。牛達と過ごす時間が長くなるにつれて、愛着も増してきたのだとか。実は畜産学科には、あるユニークな風習が。それは仔牛の出産に立ち会った生徒が名付け親になれるというもの。六月は飯澤さんが「まつり」、九月に杉山さんが「ちくわ」と仔牛に命名しました。

生き物を扱う畜産は、幅広い知識やたくさんの方の経験が必要ですが、三人はまだまだひよっこ。トラクターでうっかり柵を壊してしまったり、病気をした牛の搾乳を通常の牛乳に混ぜてしまい、全て廃棄になってしまったことも。力不足でボロボロに泣いた日、看病していた牛が息を引き取った日。辛く悲しい日も互いに励まし合い乗り越えてきました。「茨城の養豚場で働きたい」(杉山さん)、「九州や四国で肉用牛の肥育・育成に挑戦したい」(飯澤さん)、「大学に編入して、畜産や農業を更に追求したい」(増田さん)と将来の目標を掲げている一年生達。それぞれが目指す道のために。これからは町で学んでいきます。



「左から」すきやま・ことみ 1999年 神奈川県生まれ。特技はインジンの解体。
近々、友人の孫師が捕獲したインジンをいただく予定。
いざわのののか 1999年 福島県生まれ。
「まつり」の由来は「もう少しで夏祭りの季節だったから、大好きな夏を連想させる名前にしてみました！」
ますだ・たかひろ 1999年 埼玉県生まれ。
よく訪れる町内の場所は酒沼。
「ただ眺めているだけでフレッシュできるんです」



まなびながら教える

人と地域と、染まる

染織家 武笠京子

「染織を通じて町の人を喜ばせたい。そして出来るだけ多くの町民の方とつながれたら嬉しいです」
採れたての野菜が知らない間に玄関先にごっそりと届いている。田舎あるある。も満喫し、教え・学び、地域を色とりどりに染め上げていく。そんな職人としての生き方がこれからも続いていきます。

「染織を通じて町の人を喜ばせたい。そして出来るだけ多くの町民の方とつながれたら嬉しいです」
採れたての野菜が知らない間に玄関先にごっそりと届いている。田舎あるある。も満喫し、教え・学び、地域を色とりどりに染め上げていく。そんな職人としての生き方がこれからも続いていきます。

「染織を通じて町の人を喜ばせたい。そして出来るだけ多くの町民の方とつながれたら嬉しいです」
採れたての野菜が知らない間に玄関先にごっそりと届いている。田舎あるある。も満喫し、教え・学び、地域を色とりどりに染め上げていく。そんな職人としての生き方がこれからも続いていきます。

「染織を通じて町の人を喜ばせたい。そして出来るだけ多くの町民の方とつながれたら嬉しいです」
採れたての野菜が知らない間に玄関先にごっそりと届いている。田舎あるある。も満喫し、教え・学び、地域を色とりどりに染め上げていく。そんな職人としての生き方がこれからも続いていきます。

「染織を通じて町の人を喜ばせたい。そして出来るだけ多くの町民の方とつながれたら嬉しいです」
採れたての野菜が知らない間に玄関先にごっそりと届いている。田舎あるある。も満喫し、教え・学び、地域を色とりどりに染め上げていく。そんな職人としての生き方がこれからも続いていきます。

「染織を通じて町の人を喜ばせたい。そして出来るだけ多くの町民の方とつながれたら嬉しいです」
採れたての野菜が知らない間に玄関先にごっそりと届いている。田舎あるある。も満喫し、教え・学び、地域を色とりどりに染め上げていく。そんな職人としての生き方がこれからも続いていきます。

たけがさ・きょうこ 「武染工房」主宰。1973年京都府生まれ。拓殖大学北海道短期大学卒。東京や北海道でサービス業、農業など様々な職種を渡り歩き、2014年に染織と出会う。2015年から茨城町地域おこし協力隊となり県内外のイベント出品やワークショップを展開。現在茨城町小幡で猫・犬と共に暮らしている。



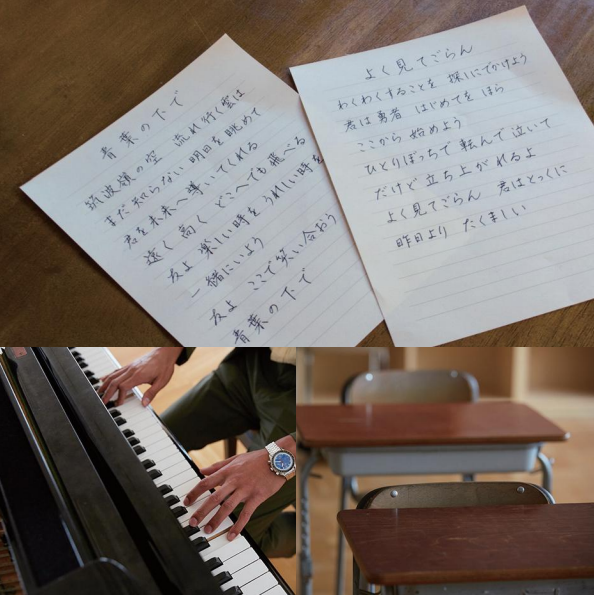
教えながらまなぶ

明日のために、寄り添う

中学教諭 田寺 浩

「この町は居心地がいいよね。寒い日の朝方には校舎から富士山も見える。天気が良い日の立哨指導などで、やわらかい陽射しを浴びると空から天使が降りてきそうだな」と感じるおだやかな雰囲気は今も昔も変わらないよ」
はじめに十年間赴任し、他校から再び赴任して八年。田寺先生は長い教員生活の半分以上を明光中学校で過ごし、生徒達を見守り続けてきました。駆け出しの教員だった頃に赴任したこの学校は、学級経営の基礎が育まれた場所。先に赴任していた指導力に優れた先輩達から学んだ、生徒たちの心を掴み集団をまとめる技術や、自然と耳を傾けてしまう話術は、生徒指導主事、陸上部の監督となった今でも活かされています。
「中学の三年間は明日のためにある」。田寺先生が毎年入学して来る生徒たちに贈る言葉です。中学生は社会人になるための助走期間。義務教育の集大成としてしっかり勉強に励み、将来の進路を決める最初の節目。しかし生徒たちの周囲を取り巻く環境や保護者の価値観は常に変化し、どの時代も問題は尽きません。
「昔より子供たちのパワーがダウンしている気がする。注意深く見守って、教え子たちをいい方向へ導きたい」。かつての生徒が保護者となり学校に戻って来ている今。大人の階段を登り始めた生徒とそれを支える親、それぞれが望む生き方を歩めるように深い愛情を持って寄り添っています。中学時代の考え方は大人になっても残る。だから生徒たちにも時には厳しく接する。そして、自分の事もふり返るといふ田寺先生。
「親と子、どちらも教え子なんで責任は重大ですよ。どんな時代になっても、生徒たちが自分の力で道を選ぶ手助けができるように、教職員も常に学び続けていかなければ」と感じます。

たでら・ひろし 1961年茨城県生まれ。茨城大学卒。つくば市立竹園東中学校へ赴任後、茨城町立明光中学校へ赴任。その後水戸市立第五中学校、水戸市立緑岡小学校を経て、明光中学校に再赴任。現在は生徒指導主事、陸上部の監督を務める。専門教科は理科。



ひびけ、うたごえ

— 青葉小学校と葵小学校の校歌 —

写真 | アラタケンジ 文 | ホシカワリエコ

茨城町では小学校再編計画により
2015年に4校が統合し「青葉小学校」が
その翌年には3校が統合し「葵小学校」が
新設されました。
2校の校歌は常陸太田市出身の音楽家
「マシコタツロウ」さんが制作を担当。
校歌に込められた想いをうかがいました。

昔からあるようなコミュニティ感が強かったので、
曲調はフォーマルな感じにし、「筑波嶺」や「涸沼」を
見て「紫陽花」を歌って、そこに生き方を重ねていけ
たらと思いました。

青葉小が「定点カメラで風景を写している感じ」だと
すると、葵小は「ハンドカメラで人に寄っていく感じ」です。
葵小は町内でも比較的都会で便利な場所にあるから
か、生活環境も美にさまざまです。話を聞くと皆さんに共
通するテーマは「愛」だと感じました。先生の愛、地元
の愛、親の愛…いろいろな「愛」をテーマに書くことと思いま
した。曲調は明るく、手拍子をしたくなるようなポップ
な感じで、大きく口をあけて元気に歌えるようにして…。

例えば親御さんが一人とも働いていて、子供が家で
親御さんの帰りを待っているときに「さみしいときでも
ひとりじゃないんだよ」ということが言えたらなど、
あつからんとした歌詞に見えるかもしれないですけど、
葵小は歌詞にすごく時間をかけました。「愛」というの
はよく見ないとわからなくて、いつも見えているもの
じゃないんだよ。あとでもいらいから、振り返ったときに
気がついてくれたらなと思いました。

歌詞に込められた想い

人生の先輩として子供たちに、簡単な言葉でなにか
論せたらなと思いました。歌詞で言っていることは、
我々親が言うようなことなんです。今はまだ、子供た
ちには意味がわからないかもしれないですけど、大人に
なつたらわかるというか…。

私は一度シンガーソングライターとしてデビューして
いるのですが、当時はただ言いたいことを言っているだけ
で「歌詞でなにかを伝えよう」とはあまり考えていな
かったんですね。でも今は歌詞がすごく大事で、時間を
かけて創るようになりました。歌詞は人の気持ちを
ひっぱらないといけないので、ある程度「こうだよ」と
言つてあげないとダメだつて気づいたんです。

歌い継がれていく校歌

通常、作詞や作曲などの制作期間は短く、締め切りま
で一週間もないことが多いんです。でも、校歌は時間
をかけて、慌てずいいものを創ろうと思ひ、「二校とも制作
期間を半年以上もりました。マシコさんのこと信じて
ますから」つて言われて…重いですがよね(笑)。でも、だから

七校の校歌にかわり あらたな校歌を創るということ

この時期の校歌制作の依頼というのは、新たに学校
を増やすわけではなく、子供が少なくなったので縮小
されて学校が統合するということです。昔から歌い継が
れて来た七校それぞれの校歌にかわり、私の創る校歌
になるわけですから責任重大です。説得力のないもの
ではいけないし、公立小学校ですから地元の方に愛さ
れるものでないといけない。また、私に依頼されたとい
うことは「私の書く意味を持たせない」と思いました。
築いたものや歴史を知らずに校歌は創れないので、
それぞれの学校に足を運びました。先生に話を聞いたり、
地元の人々の顔や風景を見たり、その場所の空気感など
を感じたかったです。神社の前で「なんか心が引き締
まる」というのと同じで、歴史ある場所に立つと気持ち
が「プリッ」として伝わるものがあるんですね。「こはさつき
畑で会ったおじいちゃんの出身校かな、と思いをめぐ
らせたりして。あえていろいろ背負い込んでから創る
方法を選びました。

風光明媚な情景を歌った青葉小学校 愛をテーマにした葵小学校

風光明媚な地にある青葉小の校歌には、「筑波嶺」
と「涸沼」の二つを歌詞に入れてほしいと言われました。
涸沼自然公園にある紫陽花もとてもきれいなので、
それもぜひ入れたいなと思ひ「八仙の丘」という歌詞
を創りました(八仙花は紫陽花の別名)。青葉小は



マシコタツロウ 音楽家。一青窈の「ハナミズキ」をはじめ数々の楽曲をアーティストに提供。
シンガーソングライター、ラジオパーソナリティとしても活躍。
常陸太田大使や茨城新聞親善大使を務めるなど茨城県の地域振興に貢献。
2015年茨城町立青葉小学校、翌年葵小学校の校歌を制作。2017年茨城町ふるさと大使に就任。
Twitter @MASHIKO_TATSURO FACEBOOK facebook.com/マシコタツロウ-229991950813330

こそいいものを創ろうと、時間をかけて頑張りました。
校歌が歌い継がれていくこと…これはもう、私の就い
ている職業の特権じゃないかと思ひます。校歌が命を
持つて生きていくということは嬉しいですね。なので、な
んかずい職業というか(笑)。それに校歌で特別で「う
ちの息子がマシコさんの校歌を歌ってるんです」と声をか
けられたり。ヒットソングにはなれないけど「みんなのう
た」になれるのが幸せです。学校の同窓会のとこまで、
誰かが校歌を歌い始めたりします。そのときに「あれつ、
校歌つていいうたじゃね？」つて言つてほしいですね。そう
なればしめたもので、そこをやりと校歌の完成です。…そう
考えると、五十年単位の仕事かな、と思ひます(笑) ●

まちで暮らす人 まちを想う人

写真：アラタケンジ 文：米村優子

Feeling & Thinking

自分の環境は自分で作る

まちで暮らす人

wayland 主宰

アーティスト・アートディレクター 本城竜

Make your own place

本城さんは一九八二年茨城県水戸市生まれ。二〇一二年から茨城町南栗崎に在住。茨城高校卒業後、全国各地の工場や職人から様々な技術を習得。平面から立体まであらゆるマテリアルを駆使した表現方法を総合的に手掛けています。近年は原宿で話題のフォトジェニックなカフェや最近リニューアルした品川のホテル、イベントの空間デザインなどを手がけ、国内外で独自の世界観を発信しています。

濃密な時間

幼い頃は、幼馴染み達と新聞のチラシで変形ロボットを作ったり、木っ端で船を作つて川に流して遊んでいました。そんな遊びが、私のものづくりの原点かもしれません。一方で油絵が趣味の父が私をヌードデッサンに連れていくのですが、退屈で大嫌いでしたし、自分と絵は絶対に縁のないものと思っていました。その後医者を目指した私は茨城中学校に入ったのですが、そこで上級生たちと交流するうちに価値観が大きく揺さぶられ、幸せの形の多様性に触れました。その後、中三の頃でしょうか。自然と美術に惹かれていったんです。

高校時代は駅や様々な場所で似顔絵を描いたり、自転車の修理をして画材代を稼ぎバイクの免許代も捻出しました。美大を目指した時期もありましたが、自分の力だけで評価されて生きたいと思つて。その後一九歳からバイクで色々な人に会いに行き、勉強させてもらっていました。美大の先生、携帯やロードスターのデザイナー、伝統工芸や工場の職人…、次から次へと出会いが連鎖して行きました。樹脂や鉄など様々な素材の加工技術を習い、特に友部町(現笠間市)の鉄工職人には仕事のイロハも教わりました。僕の創作の根幹にあるのは、人がちょっと幸せになれるもの。それを創るのに中途半端では嫌なので、徹底的に経験して勉強してきました。

二〇代は美術で飯なんてほとんど食えなかった。道端の雑草を天ぷらにして食べてたぐらいに(笑)。昭和のドラマみたいに職人の工房前で菓子折りを

持つて正座したり、経営者が集まるパーティーや銀座のバーに人脈作りに行ったり。濃密な時間でした。はつと見、猪突猛進タイプに見られがちなんですが、実は臆病ですごく石橋を叩いて渡るタイプなんです。今のアーティストは、どこか経営者視点でいなければと感じています。自身の営業力も必要。私のそれは二〇代に多種多様なバイトで生計を立てていた経験から培われたものも多いです。中高時代の恩師に言われた「自分の環境は自分で作れ」という言葉を常に心掛けているから、今も美術の世界で生きていられるのかもしれない。

みんなが笑顔になれたら

創作のアイデアはいつも湧き出ています。枯渇するって感覚は、正直まだわからないですね。だから制作の依頼が来ると、お客さんのニーズに合致するアイデアをコップですく上げて形にするだけです。たとえばデザインでもファイナンシャルの考え方とか。こういう材料を使ってこう作ればと考えている



Connect
people and places

人と場所とのかけ橋に まちを想う人 女優 根矢涼香



のは楽しくて仕方ない。でも、こだわるあまり制作の時間があまり取れないことも多く、納期に追われて六日間徹夜したこともあります。器用貧乏に一人で色々やってみようと思われがちですが、私にはこのやり方が合っている。何だっけ自由なやつでいいんだよと自分がバイオラになっていきたいと思ってるんです。この先、もっといいものを、もっと純粋に湧き出てくるものを、人と出会って得たものを形にしていきたい。それが百年も二百年も残って、誰かに共感してもらえたらそれ以上に嬉しいことはないです。ヨボヨボのジジイになったら絵本も描きたい。見たことない価値観をコレクションするトレジャーハンターにもなりたい。できることなら、機械の身体になって永遠に生きて作り続けたいですよ。綺麗事かもしれませんが、関わった人みんなが笑顔になれたら一番いい。それが私の中ではアートなんだと思います。

もつたない町

運命は信じないけど必然性は感じる。出会いや災難も、いつも何かのきっかけになっていた。私が茨城町と出会ったきっかけもそうでした。東日本大震災の後、それまであった仕事のパタッと来なくなると、それに畳み掛けるように水戸で借りていた家も道路拡張で立ち退きを迫られ。お金もないし、探しても次の場所もない。道ゆく人にまで空き物件がないか聞いて回るぐらい切実な状況でした。その頃たまたま茨城町をバイクで走っていたら、畑仕事の中のおばちゃんを見かけ、この辺に物件無いですかと声をかけたんです。それが初対面なのに親戚の家が空いているからそこで暮らしたら？」とその後連絡があり、言われるままに引越した後、不思議と仕事がダツツと増え始めた。私はこの町に助けられたんです。茨城町は一言で表すと、もつたない町。まず涸沼はラムサル条約に登録された汽水湖ですよ。汽水つただけでも日本では希少なスポット。もつと観光PRしてもいい所ですよ。母校の生物部が、涸沼の泥の中から絶滅したと言わ

れていたシヤジクモ類を採取して培養に成功しているんですが、そういう汽水ならではの生態系もアピルポイントになりますよね。交通量が少ないことを逆に売りにして周囲にサイクリングロードも整備したり。特産品も楽しめる休憩所を設ければ一日楽しめる場所になりますよ。

農業が盛んだから美味しいものもいっぱいある。私は炭水化物中毒なんです。米がととても美味しい。涸沼で採れた白魚の掻き揚げも衝撃だったなあ。六次産業を力にいれるのもいいのでは？^{へん}辺鄙な場所ですが、都内へも遠くないし商業の利用価値も高いと思いますよ。私は全国各地で地域に密着した事業とか見えてきているんですが、やはり現代社会に即した考え方が必要。もうちょっと地域全体が柔軟になればもつと面白くなるし、想像以上に可能性を秘めた地域だと思っんです。まずは地元の人が地元のことを知る。自慢できる町なんだよつともつと自覚すべきだと思います。

すごく住みやすいですよ、茨城町つて。畑や田んぼを見ると、四季を感じます。うちから筑波山も見えますよ。ここにきて、すごく心が豊かになったと思います。茨城町に色々助けてもらったので、今度は私が一番得意とする美術で地域貢献できればいいなと思っています。●



根矢さんは一九九四年茨城町上石崎生まれ。映画24区所属。二〇〇八年にオーディションでヒロインの座を勝ち取り、国民文化祭作品「森は生きている」で舞台デビュー。大学進学を機に上京し映画へと活動の場を拡げ、びあフィルムフェスティバル2015で四冠を受賞した「したぎのさき」、第二十回東京国際映画祭日本映画スラッシュ部門出品「神と人との間」など話題作に続々と出演。十一月二十八日〜十二月二日にSPACE雑遊で公演される舞台「Festa」も出演予定です。

自由になれた場所

実家は自然に囲まれた場所だったので、葉っぱや虫を触ったり絵を描いたり、家族みんなで映画を観ていました。人を喜ばせるのが好きで、ジブリ映画のキャラクターの真似をして家族や友達を笑わせた子供でした。

演劇に興味を持ったのは中一の頃。舞台を観て自分もやってみたいと思っていたら、弟がオーディションのチラシを学校から持ち帰って来て、それを試しに受けてみたらいきなり主演をやることに。いざステージに立つと、ワクワクが止まらないしカーテンコールも気持ちいい。客席にいるおばあちゃん泣いてるし、演じることで誰かが喜んでくれるのってこんなに嬉しいんだって思いました。その時は家の外で上手に自分を表現する方法がわからなかったし、コンプレックスや変身願望があつて。だから演じている時は心から自由になれたんです。

中学時代は勉強もそっちのけで演劇にのめり込み、劇団四季や本多劇場に通っていました。そのあと進学した高校は学業に厳しいところだったので、勉強と演劇の両立に必死でした。演劇のせいで学力が下がったと言われたら悔しかったので、高校生最後の年まで、ZEXの高校放送コンテストでの県優勝、所属劇団の主演を務めるなど、自分なりに挑戦を続けていました。進学先に立教大学の映像身体学科を選んだのは、映画の裏側が見たかったから。映像と舞台は違うもので、舞台は今日の前で見ている観客に夢を与えたり輝いていなければいけない。映像はその逆で、夢や希望を与える

というよりはリアルさそのものが魅力というか。人が隠す恥ずかしい部分が魅力的に映ったりするんです。私は舞台が長かったので、カメラ慣れをしていないから思うような演技ができなくて、それでカメラに慣れるためにモデルを始めました。写真って、二次元的な空気が映画に似ているんです。そして撮られている内に私自身も自然とシャッターを押すようになっていきました。

自然に身を任せ、心を帰す

交通の便も少なく遊び場もない。牛の肥やしも臭いし(笑)。正直、茨城町って何もないと思っただけ。でもカメラを持ち歩くと、被写体が沢山見つかるんです。辺りを歩く鶏や澗沼の景色、実家の家族たち：写真を都内の友達に見せると「いいとこじゃん！もつと誇りなよ」と反応が良くて。都会じゃないと面白いものに出会えないと視野を狭めていたんだと思います。単に知らなかっただけで、その土地に好きなものが根付き動いている。町を出たからこそ気付けたと思います。茨城は映画のロケ地に使われる事が多いですよ。私が一番好きな作品「川の底からこんにちは」も澗沼で撮影していますし。



東京は我慢して頑張る場所。踏み込んだモノを創る人達の熱量が沢山ある。それはとても刺激になっていますが、時間を急かされている気がして息苦しさを感じることもあつて。地元は我慢する必要がない場所。辛い時や撮影が終わった時に帰ると心地いいんです。父と澗沼をドライブするのですが、何をやる訳でもなくただ写真を撮って、夜が来るのをじっと待つ。自然が奏でる音だけに身を任せる。そんな場所が故郷にあるって誇らしい。だから「澗沼だぜっ！」とドヤ顔でSNSに投稿したり(笑)。疲れた時は写真を見返し、心を町まで帰らせてあげています。茨城町にはこれからも安心してきて受け入れてくれる場所であり続けて欲しいです。

無駄なく、全てが活きる

気が付けば女優のキャリアはもう十年になります。今は映画を中心に活動していますが、作り固めたものより、崩したものを表現したいです。近い距離の人間の心に寄り添い演じたいですね。舞台や映画は、疑問と肯定の繰り返し。すぐブレちゃうし、フニャフニャになっちゃう。でも全部自分だと割り切って楽しんでいきます。ダメでも良くても何でもトライだぜ！って思っています。無駄なこととは何もない。芸術って全てが活きるから。これからは、もっと人と場所を近づけられる人になりたいと思っっています。芸術とか若者が集まる場所は東京だけじゃない。面白い事はどこでも起こる。その場所に色々な人がいるし、私もそこに行きたい。私という人間を知ってもらうことで、誰かの映画を観る入口になれるかもしれない。道はどこにいても自分の力でいくらでも拓けるんだよ、って想いが伝えられるかもしれない。今まで色々な人からきっかけを与えてもらったので、今度は私自身が誰かの架け橋になれば嬉しいです。そしていつかは地元ロケの映画に出たい。都会の人とかカッコつけた役も多かったのですが、茨城弁を使う役とか自分のルーツに近い所で映画に関われたらと思っています。

まちの知が集まる場所

図書館でつながる ひろがる ひびきあう

写真 | アラタケンジ 文 | ホシカワリエコ

図書館の扉が開くと、鼻をくすぐる古い紙やインクのおい。ほとんど話し声が聞こえない、静まり返った空間……。茨城町立図書館は、昭和五十一年に中央公民館図書室として設置され、平成八年に茨城町総合福祉センター「ゆうゆう館」の中に開設されました。

人と本との出会いをつくる

図書館には国家資格をもった図書館司書が配置されています。現在の図書館の司書は四名。「司書の仕事って一体どんなことをするのだろう」と考えたことはありませんか。カウンターに座って本のバーコードに「ピッ」としているだけではありません！

毎月テーマに添ったおすすぬ図書を選書から、乳幼児への絵本の読み聞かせ、二十施設に対する紙芝居や図書の出前サービス、月に一度、町内の小中学校への選書や出前図書、児童育成のための活動にも力を入れているほか、図書館の蔵書構成にかかわる選書については、利用者からのリクエストなどを参考に、司書と職員が図書館に足りないジャンルの本の購入を検討したりと、紹介しきれないほど多岐にわたる業務を日々行っています。

司書は本のカウンセラー

司書の重要な仕事のひとつにレファレンスサービスがあります。レファレンスサービスとは調べもの相談のこと。

利用者が必要な本や資料、情報等にたどりつけるようにサポートするもので、利用者の課題解決の大きな力となるのです。いわば「本に関するカウンセラー」のようなもの。

ある日、茨城町の図書館に「菱川師宣の見返り美人図、俵屋宗達の風神雷神図屏風の画が見たい」と五歳の男の子が母さんと一緒にやってきました。話を聞くと目をキラキラと輝かせて好奇心いっぱい、あれも見たいこれも見たい、という男の子の要望にはこだわりがあつて、それぞれ特別な一枚の画を探しているようでした。すでに市や県の図書館も探しけれど、求めているものは見つからなかったとのこと。なんとかして見せてあげたくて、司書二人で協力して探し出し「この画はどうですか？」といくつか提示したところ、やっと気に入ったものが見つかり、男の子はよろこんでくれて……。お母さんが「こんなに持ちきれない(笑)」と言いつつながら画集を借りて行きました。

つながる ひろがる ひびきあう

この出来事に刺激を受けた司書の根矢さんは、男の子の言ったものをすべて書き出して調べ、今度また男の子が来たときにすぐに応えられるように、美術専用のレファレンスノートを作ったそうです。市や県の図書館でも見つからなかったものを茨城町の図書館で探し出せたのは、男の子の知りたい・見たいというまっすぐな気持ちとお母さんの行動力、そしてそれを受けとめ、なんとかしても応えたいという司書の想いや熱意、専門的なスキル

がつながつてひびきあつたからこそ。図書館にある本を鳥瞰的に捉えていないと、たくさん本のの中から利用者の探し求めている特別な一冊の画や写真情報のようなものにはその本に含まれる一枚の画や写真情報のようにも重要です。利用者が本当に必要なものを、カウンセラーのように聞き出して的確に探し出す……。本が好き、というだけではできない仕事。利用者とのコミュニケーションを重ねることで「こういうものもあるんだ」と世界をひろげてもらつて、そこに追いつくために知識を足していくおもしろさもあります。大変だけど(笑)と司書の櫻村さん

自由に知とふれあえる場所

陽のあたるあたか窓辺で小説をゆつくりと読んだり、集中して学校の宿題をしたり、親子でDVDを見たり、毎朝新聞を読み来たり……。図書館には本を借りるだけでなく、それぞれのスタイルで知識を得ることを楽しんでいる人たちがたくさんいます。「図書館に行つたことがない」「どんな風を利用していいかわからない」「学生の頃行つたきり」……。そんな方はこの秋、是非一度に図書館に足を運んでみてください。

誰もが平等に自由に知とふれあうことができる場所、あたらしく知るよろこびを味わってみませんか。あなたの日常を色どり豊かにしてくれるようなステキな出会いが待っているかもしれません。





6,7ページで紹介した音楽家のマシコタツロウさんが青葉小学校・葵小学校の校歌に込めた思い。色々とお話を伺ううちに、話がどんどん盛り上がり…SunのWEBサイトのスペシャルコンテンツとして誌面で載せきれなかったマシコさんのインタビューを特別公開いたします。音楽家・アーティストとして、日々考えていることなどよりパーソナルな話題にも触れています。是非WEBサイトもご覧くださいね!

From Sun -編集室から-

Sun 第3号をお届けします。

今回は学校が多く登場しますね。私は小さい頃、勉強を嫌々やっていたのですが、その中で好きなものや趣味を見つけたい気がしました。年を重ね、あの大変な思いも今の楽しみに必要だったと思うと感慨深いです。[がっきー3] / 学生のときの卒論のテーマ「Carbazole 資化性新規海洋性細菌の探索と分解系遺伝子の解析」。入庁当時にそのことを相対いじられ「カルバゾールのニ〇ム〇」…そう呼ばれたときもありました。ちなみにカルバゾールとは「環境汚染物質」のことです…(泣) [243] / ふぁんとむ3改めふぁんとむ4です。ふぁんとむ3というニックネームには思い出がたくさんあったのですが、諸事情により、どうしても、泣く泣く、改名します。この苦渋の決断のお話は次のオフ会で。涙なくて話せません。ハンカチを多めにご用意ください… [ふぁんとむ3改めふぁんとむ4] / 茨城町ふるさと大使のマシコタツロウさん。大変お忙しい中、しつこくいろいろのロングインタビュー(笑)にも拘らず、終始笑顔でお付き合いいただきました。マシコさんのお人柄の良さが感じられた時間でした。紙面に載せきれなかった、音楽家としてのコアなお話、熱い思いなどなどは、いば3のWEBサイトに公開します!お楽しみに! [クロ73] / 秋の夕暮れのにたまに現れる、空に大きい湖が浮かぶような雲の並びがたまらなく好きな私。マチのケシキにも書かれていますが、たまにはぼんやり夕焼けの空を眺めるのも悪くないですね。[YANNA3]

紙面に載せきれなかった写真、取材のお話など、いば3オフィシャルWEBサイトにUPしています。

いば3ふるさとサポーターズクラブ オフィシャルWEBサイト www.town.ibaraki.lg.jp/iba3

次号は、2018年03月発行予定です。

Sun 第3号 秋冬号 2017年12月1日発行

企画・発行: いば3ふるさとサポーターズクラブ事務局

[茨城町 町長公室 秘書広聴課]

〒311-3192 茨城県東茨城郡茨城町小堤1080

TEL: 029-240-7126

MAIL: iba3@town.ibaraki.lg.jp

編集・アートディレクション・デザイン | i,D

取材・執筆 | 米村 優子 ホシカワリエコ 石川 聖太

写真 | アラタケンジ

イラスト | Kenbee67

印刷・製本 | 株式会社光和印刷

本誌内容の無断転記、記載、複写を禁じます。 ©Sun all rights reserved.

Special Thanks

茨城町立明光中学校 松浦陽菜さん 町井早苗さん [P8]

茨城町立青葉中学校 茨城県立農業大学校 茨城町立図書館

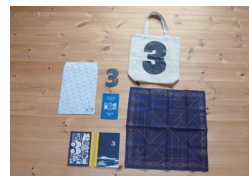


“いば3ふるさとサポーターズクラブ”は、いば3まちが考えるあたらしくてゆるやかなつながりの場です。まちとのつながりをみんなで共有し、魅力・風景・楽しみ方を見つける活動を行います。ご入会された方には、素敵なサポーターズグッズセットをプレゼント。ぜひご入会ください。

お申し込みはこちらから

www.town.ibaraki.lg.jp/iba3

“いば3”ではサポーターを募集しています!!



QRコード



親沢公園からダイヤモンド筑波を眺める。

全てが茜色に包まれる、圧倒的な自然の美しさと

スケール感を目にしたとき、あなたはどんな気持ちになりますか。

仲秋の頃、カラッと晴れた日の夕暮れ刻、空が広いこの町は美しい夕焼けに包まれます。夏に比べ空気中の水蒸気量が少なくなり、太陽からの散乱光が広範囲に散らばりやすくなるため、金糸雀色、蜜柑色、茜色と刻々と色を変えていく空の様子は、一日の終わりに安堵の表情を私達に優しく見せてくれているかのようです。

この時期になると、夕暮れの湖畔を写真に収めようと、関東一円からカメラの愛好家が溜沼に集まり、思い思いに夕陽を撮影したり、黄昏時の空をぼんやりと眺めています。

中でも、毎年三月と十月に湖畔から見る事ができる、ダイヤモンド筑波と呼ばれる現象は、湖畔から遠くに臨む筑波山の頂、二つの峰の間に太陽がにびたりと沈んでいきます。高く高い茜色の空が湖面に映り、山の稜線に陽が沈んでいく様子は美しくも幻想的な風景で、まるで時間の感覚がスッと後ろへ遠のいていくような錯覚すら覚えます。

遠く稜線に夕陽が沈み、夜の帳がおりて来る僅かな間、人々は何を想うのでしょうか。それは郷愁でもあり、また物悲しさもあり、忘れていた記憶を思い出すきっかけにもなるでしょうか。夕陽が沈む様子を眺め、残照を浴び、圧倒的な自然の美しさに包まれ、忘れていた大切な何かを思い出す為にも、秋の夕陽を見に出かけてみませんか。



茨城町は 北緯36度17分 東経140度25分
茨城県のほぼ中央部に位置します
日本有数の汽水湖である濁沼を湛え
豊富な水と里山に育まれた風土です